

〈新刊紹介〉

土井忠生編

「徒然草学習

指導の研究」

○ 徒然草といえは、わが国の古典教材の中で最もポピュラーなものの一つである。

おそらく、全国の高等学校の中で、徒然草を取り扱わないところはないのではあるまいか。しかしまた、徒然草ほど問題の多い教材も少ないであろう。徒然草を、単なる「古文」読解練習の資料としてではなく、「古典」として、学習させていくことは、まことに困難なことである。本書は、こうした、もっともポピュラーで、かつもっとも取り扱いにくい徒然草をとりあげて、その学習指導の問題を、総合的に探究しようとした共同研究の報告書である。

本書のもとになったものは、昭和三十二年十一月、広島大学でおこなわれた、広島大学国語国文学会国語教育研究協議会での発表である。当日は、数名の会員によって分担・用意された徒然草に関する基礎的調査の報告と徒然草を教材とする学習指導実践の報告を中心に、協議が進められた。その後、この報告をもとにして、問題をさらに拡充深化させ、分担者の数もふやして、徒然草学習指導の総合的探究を試みようということになり、構想も全面的にあらためられた。ただし、おのおのの項目については、あえて分担者の自由な研究にゆだねられた。こうしてできあがったのが本書である。したがって、本書は、徹密

に言えば、論文集の性格をもっている。

本書は、つぎの諸論稿から成っている。

基礎編

一 戦後における徒然草研究の問題点(黒川昌享)

昌享)

一 徒然草の文法の諸問題(山内洋一郎)

三 徒然草の学習語い(北岡清道)

四 現行教科書における徒然草の採録状況(佐藤和子・橋本暢夫)

(佐藤和子・橋本暢夫)

五 現行指導書における徒然草の取り扱い(佐本房之)

(佐本房之)

六 徒然草からの入試問題の分析(大槻和夫・奥田那男)

奥田那男)

七 徒然草の解釈・批評史(内海琢己)

八 徒然草学習の回想(久松潜一・仲田庸幸・清水文雄・池田勉・中村法・安良岡康

作・磯貝英夫・稲賀敬二・佐々木一秀・橋本暢夫・野上拓士・浜本純進・湯浅温

子)

九 徒然草教育問題史——戦前の旧制中学校・女学校などを中心——(野地潤家)

一〇 徒然草を指導される人のために

「つれづれ草」を指導される人のために(西尾実)

徒然草の序段に対する(斎藤清徳)

徒然草の表現理解のために(土井忠生)

実践編

二 徒然草取り扱い上の問題点(アンケート)(益田貞子)

(益田貞子)

三 徒然草の学習指導計画(野宗陸夫)

三 徒然草の学習指導法(長田久男)

四 徒然草学習指導研究——中学校のばあい——(長谷川孝士)

五 徒然草の学習(大村はま)

六 徒然草の学習指導のために——古語の解

きかた——(土井忠生)

七 徒然草の学習指導(佐藤虎男)

八 生徒作文にあらわれた徒然草(柄松香)

九 徒然草の学習指導(森一郎)

一〇 徒然草夏期課題の試み——高二国語乙の

ばあい——(佐藤和子)

ばあい——(佐藤和子)

以上の論文題目を通覧すれば、本書が、どのような視点から徒然草学習指導の問題にア

プローチしようとしているかは、おのずと明らかになろう。すなわち、基礎編においては、まず、徒然草研究の現状と問題点を、文学と国語学の両面から整理・展望するとともに、徒然草学習語いの選定、教科書・指導書・入学試験問題など、学習指導の基礎資料の調査・分析・検討、解釈批評史・学習史・教育史などの史的研究がなされ、最後に、研究者の立場からの助言・提案がなされているのである。さらにおしつめて言えば、Ⅰ研究展望、Ⅱ学習指導資料の基礎調査、Ⅲ史的研究Ⅳ助言、とみることもできよう。実践編では、実践者の立場から、Ⅰ問題点の整理、Ⅱ指導計画、Ⅲ指導法、Ⅳ実践報告(中学校・高等学校)などが論じられ、報告されている。こうみてくれば、本書が、徒然草の学習指導に關して、今日考えうるかぎりの問題をほとんど網羅的といってもよいくらいに広くとらあげていることがわかるであろう。

本書の特色はどこに見いだせるであろうか。これは、本書が論文集の性格をもっているだけに、簡単に述べつくせないが、全体

として感じられたいくつかのことを、ここではとりあげてみたいと思う。

その一つは、問題追求の視点、角度の周到さ・新鮮さにあると言えよう。たとえば、学習語の選定の試みなども、これまでの研究ではなれていないことである。なるほど、「重要古語三千」といった書物は出されている。しかし、一作品について、いろいろな資料を調査した上で、学習語が選定されたこととはなかった。また、「徒然草学習の回想」は、十代から六十代にわたる各世代の人々が、徒然草をどのように学習してきたかが語られており、学習者の側から徒然草教育史が生き生きと述べられたものとして興味深い。この学習史に対して、「徒然草教育問題史」は、乏しい資料をもとにしながらも、今日なしうるかぎりのアプローチがなされている。こうした「学習史」「教育史」の面の開拓は、これまでまったくなされていなかった。そのほか、本書ではじめて試みられたことというのは、いろいろ見出だすことができる。このような研究の方向は、今後の国語教育研究の上で、もっと考えられていくべきであらうと思う。

特色の第二は、実践報告の多様性にある。

「実践編」でとりあげられているものは、ほとんどすべて、自己の実践をもとにしての立論ないし実践の報告である。ここには、中学校のばあい二編も含まれている。一々の論稿にふられないのは残念であるが、その一例として、大村はま先生の実践報告をとりあげてみたい。これは、研究授業として行なわれたものの報告であるが、綿密な教材研究、指導計画、指導案など、目がさめるほどあざやかである。とくに、研究授業の問題点を具体的な形で示し、それに密着した形で授業が進められている点、研究授業のあり方を考えていく上でも啓発されることが多い。また、土井忠生先生のご論稿は、一つ一つ、ことばを緻密におさえながら、しかもそこから深く広く読みとっていくという解釈の方法を具体的に示されたもので、実践解釈学の一極北ともいべきものである。そのほか、「表現意図」をとらえる作業として五段階を示された長田久男氏の論稿、藤原与一先生の提示された「素材読み↓文法読み↓表現読み」の実践（佐藤虎男氏の論稿）、生徒に徒然草を親しませることに努力された森一郎氏の論稿、生徒作文を分析された柄松香氏の論稿、夏休みの課題にくふをされた佐藤和子さんの論稿等

々、実践報告は実に多彩で、それぞれにユニークなものをもっている。これは本書の一つの大きな特色に数えてよからうと思うのである。

○

以上、本書の性格・成立事情、構想、研究の視点、特色などについて、いくらかのことを述べてきたが、終わりに一言つけ加えておきたい。それは、本書がいわゆる啓蒙的な本ではないということ、したがって、右から左にすぐ役に立つというよりな「便利な」本ではないということである。ただし、徒然草の指導はもとより、国語教育のあり方を本格的に考ていこうとする人々にとっては、示唆の多いものであるにちがいない。もちろん、本書が実践に役立たないというのとはぜんぜんちがう。いな、大いに役に立てていかなければならないであらう。

（昭和37・5・20 三省堂刊、A5判

四四〇ページ、八〇〇円）

（大槻和夫）